研 究 会・シンポジウム報告

2024 年 7 月 16 日（火）　定例研究会報告

テーマ：　国際開発研究の脱植民地化―日本と中国の事例からの一考察―

報告者：　汪　牧耘（東京大学）

時　間：　17:00-19:00

場　所：　社会科学研究所会議室における対面＋ZOOM によるオンライン

参加者数：14 名（対面 7 名、オンライン 7 名）

報告内容概略：

国際開発をめぐる知識生産の脱植民地化の機運が高まっているなか、東アジアはその呼びかけにどう答えうるか。研究会では、報告者は経済成長と社会変革を成し遂げ、国際開発の「受け手」から「送り手」へ転身してきた日本と中国の経験を検討した。具体的には、国際開発研究（international development studies）という分野を着眼点とし、日本と中国において、異なる時代や領域で培ってきた開発経験がどのように国際開発研究という枠組みに置かれながら（再）解釈されているのかを問う。両国における学問領域の形成と展開を手がかりに、知識生産の脱植民地化を東アジアからの展望を述べた。

報告者は、①なぜ「国際開発研究」なのか、②知識生産の脱植民地化をめぐる国際的な動向、③中国の国際開発研究、④日本の国際開発研究、⑤新しい国際開発をはかるための研究課題、という 5 つのポイントを中心に、現段階の研究成果を報告した。現代の複合的危機に直面する中で、学問のあり方と役割をどう捉えるかについて、報告者と参加者は活発な意見交換、議論を行った。

記：専修大学経済学部・傅凱儀